

Title	欲望の自変を論じて三辺教授に答ふ
Sub Title	
Author	寺尾, 隆一
Publisher	三田学会
Publication year	1912
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.6, No.1 (1912. 1) ,p.53- 85
JaLC DOI	10.14991/001.19120100-0053
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19120100-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を可決せしめて國會の決議を無視し衝突時代に於けるビスマルクと同一の暴政を行へり。殊にストリピンが縣會を設けざる西南部の九縣に於て法令に従ひ地主をして參事院議官を選出せしむる時は勢ひ波蘭人の當選す可きを察してその選舉を停止し而して西紀一九一一年愈よ縣會を設置せんとするに方りて、同地方に勢力ある波蘭人の地主を抑へて露人に特別の待遇を與へんとするや國會は三票の多數を以てこの計畫に協賛を與へたりしも、參事院は之を否決したり。然るにストリピンは辭表を呈出して三月二十日ツァールに逼り遂に三月二十五日より二十七日まで議會に休會を命じ帝國憲法第八條と同一の精神に成れる國家基本法の第八十七條を適用して詔勅を以て西南部九縣に縣會を設置する件を發布したり。今やストリピンは刺客に傷けられて遂にその命を失ひ(九月十八日)而して藏相ココウゾフ之が後任に擧げられしも、露國の政體は未だ眞の立憲君主制と稱す可からずゴータの年鑑に獨裁のツァールを戴ける立憲君主國とあるは稍や當れりと云ふ可し。

慾望の自變を論じて三邊教授に答ふ

寺尾 隆 一

目次

- (一) 序説(舊稿の論構)
- (二) 効用小説
- (三) 三邊教授に答ふ

一 序 説 (舊稿の論構に就て)

予國家學會雜誌第二十五卷第十一號十一月號に於て、全部効用に關する誤謬なる一文を公けにするや、篤學なる慶應義塾大學教授三邊金藏氏は慶應義塾學報第百七十三號十二月十五日號に於て、全部効用に關する誤謬といふ論の誤謬なる名題の下に、熱痛なる批評を試みられたり。予本論を公けにせんとするに當りてや、尠からず世上學者の反對を買ふならんとは豫期し居たりし所なるが、今其第一人

慾望の自變を論じて三邊教授に答ふ

として、先づ三邊氏の如き少壯篤學の士を得たるは予の私かに悦ぶ所にして、殊に氏の態度の熱烈にして其論斷の忌憚無きは、予が平素の性質上大に多とする所也。即ち氏は、故に余は最後に斷言す、曰く、氏の提案は何れの點より云ふも維持し得可からざる誤謬なりと、抑も否哉と論結せられたる程也。乍併今氏にして暫時予に言論の自由を許さるゝならば、予は氏の駁論は徹頭徹尾予の論旨殊に其Angelpunktを無視して、徒らに語句に泥まれたる者としか思はれざるは學理の爲め予の甚だしく失望する所也。

予の該論文を少しく注意して讀まれたる諸君は一様に感せられたる事ならんが、該文全七章の中にて、最後の第七章は前きの六章の論斷に伴ひて爲されたる新たなる別種の主張たるべく、又第一章は殆んど序言的のものなりしが故に、此等前後の兩章を省略して残り第二乃至第六の五ヶ章の中にて、其真中なる第四章に於て予は『慾望の自發的低落』を主張し置きたる也。而して該章は全文の生命を支配する部分にして、予自身は、此主張を爲し得んが爲めに、前面に二ヶ章を具へ、亦該主張を支持し得んが爲めに、後方に二ヶ章を附加し置きたりしものにして、該文に於

ける一切の論斷は凡て此點に關する卑見を基礎として其上に築かれたりしもの也。従て三邊氏にして能く卑説を、何れの點より云ふも維持し得可からざる誤謬なりと論斷せんと欲せられたりせば、是非共該點に向て——而て該點に向てのみ——強兵を嚮けられざる可からざりしものにして、氏の兵法としては此點に兵を送るのみにて其陣形丈けは整壁を期し得べかりしもの也。然るに實戰の模様は是れと正反對に出で、氏は該方面に對して一兵半卒をも遣はされざりしのみか、反て章句の末に曲解的突撃を試みられたるのみなるは、學理研究の立場より觀て予の愛惜措く能はざる所也。乍去是れ恐らく予が不文なるの致せし所にして、他の何物にも因る所に非ずと思惟するが故に、暫く曩きの論旨に補足と布愆とを與へて私見の存する所を明かにし、重ねて同氏并に篤學同好の懇切なる根本的是正を俟つあらんとす。

尙一言し置かざる可からざる事あり。同氏が予を目して效用と價值とを混同せるものと看做されたる議論の如きも、其が論旨を捨て、辭句に拘はりある部分を除きては、其因て生ずる源は、是れ全く予の效用殊に慾望觀の嚴正——然り敢て

嚴正と言ふ——なるの事實に存するものにして、抑も議論の組立てより云へば少くも先づ這邊に關する私見を公けにしたりし後にて、彼の文を公けにすべかりし性質のもの也。而して予も本來は然かせん考へなりしものなるが、彼の文前掲誌、第百三頁にも述べ置きたる通り、不慮の天災の爲め「效用」「價值」等に關する私見の發表に先ちて彼の文が公けにせらるゝ事となりたる次第也。斯かる事情なるが故に、本文に於ても予は事の便宜上先づ此點に關する私見を明かにし置き、次に論を進めんと欲する者也。

二 效用小觀

宇宙間に存在する物は凡て他物に對して働き掛くる丈けの何等かの「エネルギー」「換言すれば自發的エネルギー」を有し、此物は即ち此「エネルギー」にして「エネルギー」以外に「物無し」。シヨペンハウアー氏は其著「根據の原理」に於て

.....unter dem Begriff der Materie denken wir Das, was von den Körpern noch übrig bleibt, wenn wir sie von ihrer Form und allen ihren spezifischen Qualitäten entkleiden, welches eben deshalb in allen Körpern ganz gleich, Eins und Dasselbe sein muss. Jene von uns aufgehobenen Formen und Qualitäten nun aber sind nichts Anderes, als die besondere und

speziell bestimmte Wirkungsart der Körper, welche eben die Verschiedenheit derselben ausmacht. Daher ist, wenn wir davon absehen, das dann noch Uebrigbleibende die blosse Wirkbarkeit überhaupt, das reine Wirken als solches, die Kausalität selbst, objektiv gedacht,.....ihr Wesen ist das Wirken überhaupt.....Da ferner "Substanz" identisch mit Materie; so kann man sagen Substanz ist das Wirken in abstractiv aufgefasst.....(Vgl. A. Schopenhauer, Ueber die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde, S. 77.)

と云ひ、其著「世界第一卷」にては

Ihr Sein nämlich ist ihr Wirken: kein anderes Sein derselben ist auch nur zu denken möglich. Nur als wirkend fällt sie den Raum, fällt sie die Zeit: ihre Einwirkung auf das unmittelbare Objekt (das selbst Materie ist) bedingt die Anschauung, in der sie allein existirt: die Folge der Einwirkung jedes andern materiellen Objekts auf ein anderes wird nur erkannt, sofern das letztere jetzt anders als zuvor auf das unmittelbare Objekt einwirkt, besteht nur darin. Ursach und Wirkung ist also das ganze Wesen der Materie: ihr Sein ist ihr Wirken. Höchst treffend ist daher im Deutschen der Inbegriff alles Materielle Wirklichkeit genannt, welches Wort viel bezeichnender ist, als Realität. (Vgl. Schopenhauer, Die Welt als Wille und Vorstellung, I. Bd.)

1859. S. 1c.

同第二卷にては

Da demnach das Wesen, Essentia, der Materie im Wirken überhaupt besteht, die Wirklichkeit, Existentia, der Dinge aber eben in ihr Materialität, die also wieder mit dem Wirken überhaupt Eins ist; so lässt sich von der Materie behaupten, dass bei ihr Existentia und Essentia zusammenfallen und Eins seien: denn sie hat keine andern Attribute als das Dasein selbst überhaupt und abgesehen von aller näheren Bestimmung desselben. (Vgl. Derselbe, II Bd. S. 52.)

と言へる也。而して此「エネルギー」は絶對的超我的のものにして、他に獸類が棲息

慾望の自變を論じて三邊教授に答ふ

するや否や、人類が生存して該「エネルギー」と何等かの交渉を始むるや否や等の如き關係的觀念より全然超越せる所謂「物自爾」なり。

然るに各人と全然没交渉なる斯かる物理的・化學的物自爾は各人に於て之れを研究するの要なく、唯是れが各人と一定の交渉を生じ、各人に依りて現識せられたる其儘のものとして受取らるゝ限度、換言すれば其物自爾の如何を全然顧みることなく、其物自爾が「各人の現識に上りたる限りに於てのみ、其物は各人に依りて其れ丈の意義を認めらるゝものたる也。」カント氏が其「純粹理性批判」に於て

Wenn wir aber auch von Dingen an sich selbst etwas durch den reinen Verstand synthetisch sagen könnten, (welches gleichwohl unmöglich ist) so würde dieses doch gar nicht auf Erscheinungen, welche nicht Dinge an sich selbst vorstellen, gezogen werden können..... und so werden Raum und Zeit nicht Bestimmungen der Dinge an sich, sondern der Erscheinungen sein: was die Dinge an sich sein mögen, weiss ich nicht und brauche es nicht zu wissen, weil mir doch niemals ein Ding anders, als in der Erscheinung vorkommen kann. (Vgl. I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, 1865, hiesig, von v. Kirchmann, S. 279.)

と云へるは此意也。シヨペンハウエル氏亦

.....die Welt, welche ihn umgiebt, nur als Vorstellung da ist, d.h. durchweg nur in Beziehung auf ein Anderes, das Vorstellende, welches er selbst ist..... Keine Wahrheit ist also gewisser, von allen andern unabhängiger und eines Beweises weniger bedürftig, als diese, dass Alles, was für die Erkenntnis da ist, also diese ganze Welt, nur Objekt in Beziehung auf das

Subjekt ist, Anschauung des Anschauenden, mit Einem Wort, Vorstellung. (Vgl. Derselbe, a. a. O. I Bd. S. 4 u. 5)

と云へり、尙本書第四百四十三頁に於ても此事を詳論し、あれ共歸着する所「Keine Objekt ohne Subjekt」と云ふに在りて一々引證し來るも煩はしければ是れにて止むべき事とせんが、兎に角跳むる人ありての花現象ありての實在現識ありての世界なる事は争ふ可からざる事に屬す。されば彼のノイマン氏が

Nützlichkeit haben viele Dinge, deren nützliche Eigenschaften gar nicht erfasst und nicht gewürdigt werden, da es an entsprechender Kenntnis oder entsprechenden Bedürfnissen, Wünschen, Neigungen u. s. w. gebricht. (Vgl. Neumann, Grundlagen d. Volksw. I. 1889, S. 54.)

と云へる、亦クラインヅエヒター教授が

.....drei Momenten....., von denen eines (die Diensttauglichkeit) eine objektiv bestimmte und messbare Grösse ist,..... (F. Kleinwächter, Lehrbuch d. Nat. Ök., 1909, S. 282.)

と云へる等凡て無用也。然り而して尙更に嚴格に云ふならば、吾人は「各人」の抽象的集合體としての「吾人」の世界が存在する者とは考ふる事能はざる也。従て一個の物自爾が如何様に「吾人」の現識の上に表はるゝやてふ事は、全く研究するの要なく、唯吾人は或物自爾が個々の「吾人」の上に如何に現はるゝやてふ事をのみ研究するを要する也。即ち現識としての世界は凡て各人に個々別々の世界也、彼のシヨ

ペンハヴァー氏が Die Welt ist meine Vorstellung と云へるは這般の消息を傳ふるものにして彼レデカルト氏が Cogito ergo sum と云へるも其意の一部分は慥かに此邊に在る也。

扱斯く論じ來りて予は經濟學者の言ふ所を聞くに不幸彼等の中にて此種の抽象的「吾人」の現識としての世界を研究せんとする者甚だ尠からざるを見る也。即ちオツペンハイマー教授は

Das Wort "nützlich" aber hat im Sprachgebrauch die Bedeutung objektiver Eignung für gewisse Zwecke oder Bedürfnisse. (Vgl. F. Oppenheimer, Theorie d. rein. u. pol. Ök. 1910. S. 316)

と述べ、スマート教授が一層明確に general capability of ministering to human wellbeing 及び utility is the importance which a good possesses as generally capable of ministering to the wellbeing of a subject,.....

(Cf. W. Smart, An Introduction to the Theory of Value, 1910. p. 14.)

と説くが如き是れにして我國にては河上教授が物が人類の慾望を満足せしむるの力を名けて其の物の效用と云ふ物の效用はそのもの、性質形状にして變化なき限りは一定不變なり、蓋し效用とは物の客觀的性質なればなり、經濟學原論上卷

序論第五八頁(教授は其近業の物財の價值に於て效用を主觀的のものと改説せられたるが故に、此點に關しては批評せず、唯人類と云はれたる點を批評せんが爲めに此部類に入れたり)と云はれ、氣賀教授註一が「吾人」の慾望に満足を與ふるの力を稱して利用又は實利 Utility, Nutzen, Utilité と云ひ、商業大辭書一八四二頁(利用)又は吾人が同種貨物全般に對して抽象的に認むる所謂效用なるもの……(經濟全書第一卷第四編第七二頁)と云はれたるが如き是なり。若し所謂效用又は利用なるものが此くの如き意義を有するものなりとすれば、予は效用なる觀念は、經濟學に於ても亦論ずるの要なきものなるを信ず。蓋し吾人の慾望と云ふ事は實は極端なる抽象論にして「吾人」の慾望てふ慾望は實際上具象的に存在せざる一種の慾望を過抽象的に擬制拈出したるものに過ぎざるなり、何となれば「吾人」てふ綜合體的意志も人格も無く、從て「吾人」に慾望の存せん由莫ければ也。從て此種の「擬制的抽象的慾望を満足するの力」と解せられたる茲に所謂效用は、毫も實際に存在せざるものに對する觀念にして、之を個々の吾人が實際主觀的に感ずる所のものと比較すれば、其逕底や實に非常なるものにして、若し客觀主觀等の語を唯物觀唯心觀、實

在論、觀念論等の意義を含まざる他の意義に用ゆとすれば、後者の全然主觀的なるに反し、前者は——各個人の立場より觀れば——全然客觀的也。恰かも曩きの物自爾が吾人と何等の關係も無きものなるが如く、此の抽象的擬制的客觀的觀念(吾人)と具體的現存的、主觀的觀念(即ち、吾人)とは亦何等の交渉をも有せざる也。吾人は無意義なる物自爾を研究するの要なしとせし如く、予は實際には存存せざる所の斯かる擬制せられたる觀念を研究するの要なしとするものなり。(註二)從て此種の見解には何等の價をも認めざる也。

註一、氣賀教授は其文意より按ずるに經濟全書に於ては、效用を客觀的に解せられたるものと思はる。然るに商業大辭書に於ては

「實利の大小は……吾人の慾望の強弱に正比し、全然主觀的のものなれば、人に依り場所と時とに依り同一貨物も種々實利を異にす……」と云はれ居るが故に、後者に於ては明かに實利を主觀的と解せられたる也。而して教授は此兩者を共に utility, Nutzen, utilities の譯辭なりとせらるゝが故に、從て一の場合には客觀的(經濟全書に於て)效用が客觀的に用ひられたるものなる事は、教授が清水に不足を感じざる地方に在りて、其一定身例令は一升の水は渴を解するの料として吾人に利益を與ふ可し(七二頁)と云はるゝに依りて明かなり、他の場合には主觀的に用ひられたるものなれ共、予が今茲に執りつゝあるが如き態度即ち、擬制的吾人を駁撃する立場より觀れば、兩者共に各個人の立場より觀て客觀的也。

註二、予が「吾人の慾望を否認し、從て此慾望を満足する力」と解したる、效用を否認するは、それが實際に

存在せず亦存在し得ざる筈の擬制に外ならざるが爲めの。故に彼の一旦は個々の各人の主觀的慾望たりし所のものが、其後互に集合して後天的に平準點を見出したりと云ふ意味の准客觀的慾望、即ち個々の各人に取れて夫れ夫れに主觀的なりし多數の効用が、其後互に相集合せるの結果として強弱平均せられたる平準的効用となれりと云ふ意味に於けるものは予の固より是認する所にして、予はセリグマン氏の所謂 Social utility を否認せずして寧ろ肯定する者也(Social utility is made up of a combination of individual utilities. [Principles, 1909, p. 180.]) 蓋し此理を是認するに非ざれば經濟學の重要問題たる市場代價論は之を説明する事不可能となれば也。然り而して價值論が此市場代價論に先たざるべからざる事も亦吾人の齊しく識る所也。

然らば敢て問ふ、諸家の所謂「吾人の慾望は果して終に擬制的のものなるや、平準的のものなるに非ざるや如何。答へて曰く、全然擬制的のもの也。何となれば諸家の所謂「吾人の慾望」が若し既存の個別慾望の平準なりとせんか、然らば此等の諸家は此平準慾望を説くに先ちて個々の慾望を説かれざるべからざれば也。即ち「平準的准客觀的慾望を満足する力」と解したる、效用を喋々するに先ちて「個別的、主觀的慾望を満足する力」と解したる、エトワスを説かれざるべからざりし也。換言すれば諸家の所謂「効用(平準的なる)」を説かるゝに先ち、或意味に於て「價值」を説かるゝの必要ありし也。然るに、此等諸家の論構を觀るに事實は全く此論理的條件の反對に出で、諸家は「只價值」を説かぬが爲めに先づ諸家の所謂「効用」を説かるゝを見る也。是れ諸家の所謂効用がセリグマン氏が謂ふ所の平準的社會的効用に非ず、從て其根據たる彼の所謂「吾人の慾望」なるものが既存の個別的慾望を數理的後天的(?)に算出せられたる結果に成るにはあらで、實は個別的慾望が先づ存在せざる可からざるものなるの理を認めずして、初めより慢然と獨斷的、先天的(?)に拈出せられたるものに外ならざるを曝露するものに非ずして何ぞ、予が諸家の所謂「吾人類の慾望を一片の擬制に過

きずとし従て此慾望を満足するの力たる茲に所謂効用も亦無用なる擬制に過ぎずと云ふは之れが爲めにして予が首文に於て駁撃を加へたる亦之が爲也。

以上を以て予は物自爾并に擬制的綜合的現識擬制には人格無く従て現識するの主格なきが故に、嚴格に云へば實は現識に非ざる也を研究するの要無きを論じたるが、諸個々の各人に現はれたる現識は前にも述べたるが如く實に、思想世界の大半を占むる問題にして、意志と合して、世界の全部を成すものなり。然るに同一の物自爾にても其之れに對する識者 Vorstellende の「受器」即ち通常に所謂「主觀」の狀態如何に依りて、其現識として現はるゝ世界では大差あるべきは當然なるが、心理上より觀て此受器の緊張狀態を慾念と稱し、吾人は之を慾望と云ふ。従て現識としての世界を經濟的方面に於て觀察せんとする吾人は、亦其研究に當りて、此受器緊張の狀態即ち慾望より始めざる可からざるは明かなり。そは扱て措き兎に角受器緊張の狀況如何によりて現識として現はるゝ世界は大に其形態を異にする無き能はざる也、而して斯く現識せられたる世界を稱して、予は經濟學上之を効用とは呼ぶ也。

今經濟學者にして、該現識に該當する觀念を論じ居れるや否やは別問題として、兎に角或種の主觀的觀念の存在を認め、之を「効用」と稱せる者、換言すれば効用を主觀的なりとする者を例舉すれば、獨逸語國にては、フイリツボヴィツチ教授が

die ganze Skala der Bedürfnisse und Bedürfnisregungen,....., die zu jeder Zeit bei jedem Menschen in bestimmter Weise vorhanden ist, wird unser Urtheil über den Nutzen, den die Güter für uns haben, bestimmen und dieser wird dadurch zum Masse des Wertes, den wir den Gütern beilegen. (Vgl. Philippovich, Grundriss, I Bd. 1908, S. 7.)

と述べて、「或人」或時」と云ふは全然主觀論的なるを表示するものなるが、氏の外シユモルラー氏 (Grundriss, I Bd. 1908, S. 2, II Bd. 1904, S. 105) レール (Grundbegriffe, 1893, S. 121) 中氏等にも之を認め得べく次に佛國にてはクルセル・セマイユ氏が

.....l'utilité.....peut augmenter ou diminuer et c'est par l'utilité plus ou moins grande qu'elles ont en elles que les richesses augmentent ou diminuent..... Des deux termes qui constituent le rapport d'utilité, l'un l'homme, est le sujet, l'autre, la chose, est objet. L'utilité peut augmenter ou diminuer, soit par un changement dans l'état d'homme et, dans ce cas, l'augmentation ou la diminution est subjective, soit par un changement dans l'état de la chose, et alors l'augmentation ou la diminution est objective. (Voy. Courcelle-Sénéuil, Traité d'Econ. Pol. I. 1891. 41 et 42.)

と述べて、ボード教授が

.....Le mot d'utilité..... signifie..... que la propriété de répondre à un besoin ou à un désir quelconque, et cette utilité se mesure uniquement à l'intensité de ce besoin ou de ce désir. Nous avons proposé nous-même,..... celui de desirabilité.....

慾望の自變を論じて三邊教授に答ふ

66 (Vol. Gide, Cours d'Econ, Pol. 1911, p. 44.)

と云ふが如き即ち是れにして、英米にても此事あり即ちゼヴォンス氏は

Most persons confuse the utility with the physical qualities which are merely the basis or requisit condition of the utility. The utility of gold, for instance, cannot be said to consist in its beautiful yellow colour, its ductility, freedom from corrosion, and high specific gravity. If these qualities constituted utility, then gold would be useful even to the drowning traveler whose pockets are loaded with coin. The water of the river in which he drowns would, moreover, be useful, because its qualities remain the same as if it served the population of a town for drinking and washing purposes. As Senior briefly remarks: "utility denotes no intrinsic quality in the things which we call useful; it merely expresses their relations to the pains and pleasures of mankind." (Of. Princ. of Pol. Econ.)

マーシャル氏は

The utility of a thing to a person at a time is measured by the extent to which it satisfies his wants. (Marshall, Principles, 1898, p. 167.)

Utility is taken to be correlative to Desire or Want. (Ibid, 1907, p. 92.)

デーヴンポート氏は

.....it seems to be the truth that no quality or attribute.....utility or other.....is really intrinsic.....but the subjective effect or interpretation of the external phenomenon.....the ultimate truth is, then, that, like utility, all these qualities are such only in the sense of relations between the objective fact and the human consciousness.....there is no place for "intrinsic" qualities anywhere, unless as expressive of the faith that there is somewhere a reality in itself lying behind and upholding the reality as it appeals to us. (Of. Davenport, Value and Distribution, 1908, p. 317.)

と云へる也。

倍斯くの如く現識せられたるもの(效用)を認識する事によりて始めて價值なる觀念を生ずる也。其認識に當りてや或は比較考量あるべく、或は既得の經驗に訴ふる事もある也。乍去此事を説かんは予が今日の目的に非ざるが故に効用は直観にして價值は認識也と云ひ置くに止めん。

題して「効用小観」と言ふ如く、本章に於ては予は效用の事に就てのみ意見を述べ置きたり、而して稍々冗長に亘りたるの観あるも、是れ次章に於ける「慾望の自變を論ずるが爲めに是非共前以て述べ置くの要あるが故也。前述せし所は實に「全部効用に關する誤謬の根據たる「慾望の自變」の立脚點にして嘗て、客十一月下旬國家學會雜誌に投じ置きたる「勤勞及勞働の區分に關する愚考」の結論の部に於て津村教授の所論を批評するに當りて既に別方面より述べ置きたり。三邊氏が本章と併せ讀まれん事を希望す。而して同文に於ても約し置きたる如く此問題に就ては予は他日認識論を草して明かにす可く夫れと同時に近日ゴッセンメンガー、ゼヴォンスの三泉、并に是れに對するクラーク、スマート、諸氏の態度を詳查の上、從來

慣用せらるゝ効用及價値の何物なりしやに就ての私見を發表せんと欲す。

Jedes Wort über das Wesen des Nutzens unnütz wäre. (H. Dietzel, Theoret. Soziolok. S. 191.)

Die ältere Nationalökonomie hat sich vielfach um die Begriffe des Werths abgemüht; weniger hat sie über dem Werth der Begriffe nachgedacht. (G. Cohn, System d. Nat. Ök., I Bd. S. 131.)

此種の評は予に於て固より甘受す可き而已。

三 慾望の自變及反射を略述して三邊教授に答ふ

註予は慾望の自變を論じて限界効用説を否認すてふ題目の下に前記二章の外尙(三)慾望の自變(四)慾望の時間的反射(五)限界効用説の否認(六)三邊教授に答ふなる四章を附して論を構へ置きたるが其紙數は本誌の紙面に換算して約九十頁のものなり。然る處、只今特に本文の爲めに本誌の餘を惠まれたる我高城ドクトルより紙數を約三十頁にせよとの注意を得たり。今本文の全部を三十頁に壓搾するには初めより稿を改むるの要あるが故に亦もや期日を延引して本誌に迷惑を及ぼすの恐あるのみならず、予は此問題を可成詳細に解決しおかんと思ふが故に本文第三章以下を其儘切斷して之れを京都法學會雜誌に移す事とし、只第六章の内容を擴張して本文を結び置かんとす。其結果充分に慾望の自變を論ぜずして三邊教授に答ふる事となれるは予の大に遺憾とする所なれ共特に本問題に關係を有せざる一般の諸君には一通り分明なる程度迄は論じ置きたり、只本文の體裁が前掲理由よりして龍頭蛇尾となれるを不快とせらるゝ諸君、遮幾くば蛇尾を笑ふなくして分量的龍頭に接續すべきものを併せ讀まれん事を。

三邊教授の反問は三個ありて何れも番號を附しあり。

〔第一問〕。予が論者或は言はん水の限界効用は零なり、故に吾人は一盞の水に對しては何等の價値をも認めず、然れ共……水其ものが吾人の死活を制扼するを知悉する者なり、既に此事を知悉す、豈に大なる價値を認むるに非ずや……と云へるに對して、今從來の學者にして眞に氏が此所に期待するが如き言説をなす者ならしめば氏の此に對する駁撃は眞に道理なりと言はざる可らず、何となれば彼等に於て斯る説をなす者ならんには彼等は先づ第一に効用と價値とを混同し、第二に水全體には價値あり一部には價値なしと説く者なればなり、乍併是れ果して事實なりや吾人は固く其然らざるを信ず、論より證據請ふ次の言を讀め、とて前掲經濟全書第一卷第四編第七十二頁乃至七十四頁に於ける氣賀教授の所論を引用し來り、終に、從來の學者が効用と價値とを嚴別し一定量の水には價値を認むることある可し、水全體に對しては價値を認むること殆んど無しと説くや、概ね斯くの如きなり、然れば寺尾氏が此點に對して駁撃を加へらるゝは、眞に理由なきものと云ふ可く、氏の所論を確むる上に於ては寸毫の實効無しと謂ふ可きなり。而して余が之を以て寺尾氏が舊説を誤解せられ居る一證となす所以なりとす、抑も否哉と論斷

70 せられたり。故に此問に對して世上學者が實際に此く云ひ居れる實證を提供すれば此第一問は氷解するにて、斯くせば教授は予の、此に對する駁撃は眞理なりと言はざる可からずと認めらるゝならん。偕今其一例はスマート教授が

Thus water, air, etc. being, in their totality, conditions of our life, we attach value to them as a whole, and, indeed, speak of them as "infinitely valuable." But we do not attach value to any individual portion of them, because, where there is enough to allow of waste, our lives are not dependent on any individual portion. (W. Smart, An Introduction to the Theory of Value, 1910, p. 17.)

と云へるを舉げんに、スマート教授は水全體として價值を認めらるゝを云ふのみならず、水全體には價值あり、一部には價值なしと説く者也。予淺學にして未だスマート教授果して効用と價值とを混同せるや否やを知らざる也。切に三邊教授の教を俟つ。是れにて第一問は全部氷解したり、乍去予は此事實を捕へて直に氣賀教授の説を誤れりと斷ずるを好まざる也。蓋しスマート教授又は予の謂ふ「價值」と氣賀教授の謂はるゝ「價值」と其内容に於て必ずしも差異なきを保せざればなり。是れ吾人が單に片句末語に泥して自己の物尺を以て他人の説を付度するを慎む所以也。予の私見に依れば氣賀氏の説は第二章に述べ置きたる方面より批

判す可きもの也。

〔第二問〕三邊教授は寺尾氏は其第三章に於て更に全部効用に關する從來一般の説明は實に重大なる誤謬なりとして左の如く説かる、曰く「論者が全部効用の計算なりと稱するは、實は一定量の水の全部効用を計上したるものにはあらで、其水の存在量が一なる時に於ける限界効用、二なる時三なる時……百なる時に於ける各場合の各當該限界効用を別々に算出し置きて、此等種種の場合に於ける種種の個々別々の限界効用を慢然合算したる迄の事にして、寔に謂はれなき算法と云はざるべからず……」惟ふに一定量の財の中にて某單位量が優位の慾望を充足し他の單位量が劣位の慾望を充足する等の事は認識論上有り得べからざるものなり。故に從來の論者が謂ふ意味に於ける全部効用なるものは如何なる場合に於ても存在することなし」と此は果して正當なる可きや否や。今限界効用及全部効用を例解して例ば「……」など説くを聴き、之を寺尾氏の所説に比するときは、理は當に寺尾氏の側にあるやに思はれざるにあらず……然れ共今此かる誤解を招ぎ易き例解を棄て、左る憂なき他の例解例へば米五石を所有して其内最初の一石は生存

上必須食料に供し、次の一石をば酒類醸造の用に供し、第三の一石をば耕作其他に用ふる、牧畜の飼料、更らに第四の一石をば娛樂用の鳥獸類の飼料に供するものと、第五の一石は餘剰にして更らに用途なしと假定せんに、此場合に於ける限界効用は零なれども併し五石の米全體より受くる効用は例へば $100 + 10 + 20 + 30$ の如くにして二十なり」と云ふが如きを探り、之を寺尾氏の説と對比するときは果して如何。此場合に於ては存在量一なるとき、二なるとき、三なるとき、等各異の時に於ける効用を算出して之を合計したるものにあらざるや論なき其上に、一定量の財の中の某單位量が優位の慾望を充足し、同時に他の單位量が劣位の慾望を充足する等の事あり得可からずとも亦謂ひ難かる可きが故に、氏の非難は此處に消滅すべきなり。」と云はる。

本問は全然三邊教授の誤解とも言ひ去り難く、教授の言はるゝ中には、教授の誤りに非ずして立場の差異に基くものも幾分か存在する如く思ふゝが故に、勿論予の立場をも力めて明かにせざる可からざる事乍ら、先づ一應三邊教授と同一の立場即ち慾望は自變せざるものとの假定の上に立ちて答へ置き然る後予の立場に

還る方公平無私なるを得と考ふるが故に然かする事とせん、懷ふに教授反問の要點は二なり、即ち(一)前掲の如き例に於ては、各異の時に於ける効用を算出して之を合計したるものならざるにあらずやと云ふ事と(二)一定量の財の中の各單位量の同時に充足する慾望間に優劣の差なしとは云ひ得ずと云ふ事是也。

(一)三邊教授の例に於ける米五石の中に第一の一石のみを、八の効用の食料に供し、次の一石をば、六の醸造用に供して食料に供せざるに至るは抑も何故なりやと考ふるに、是れ全く第二石目を食料として用ゆる事によりて得べき効用が醸造用として得べき効用の「六」よりも少なきに因るものなり、従て此場合四石を悉く食料又は醸造料等の一に用ひたる場合と毫も異なることなし、故に三邊氏が「左の誤解の憂なき例解」とせられたる該例解は依然として氏が「誤解を招き易き例解」とせられたる水の例と異ならず。

(二)三邊教授等の「信せらるゝ彼の限界効用説は、財の個々の單位量の價值は其限界効用によりて定まる、何となれば今其中の何れの一個を失ふとするも、之が爲め失ふ所の享樂は最終單位量の充足しつゝ、ありし慾望即ち其財の限界効用に外な

74 らざれば也」と云ふ。而して斯く何れの慾望を充足しつゝある財を失ふも、此慾望は最小の慾望を充足しつゝある財にて充當するを得と云ふ事は財の一定單位量が種々の大きさの慾望を充足するが爲めに彼此流用せられ得と云ふ事と、之を反對に觀察して、各單位を流用して同一大きさの慾望上に集中し得と云ふ事の前提の下に立つものなり、今此心理を進めて一財にて充足せられ得る各種程度の大きさの慾望否不足の感と云はんは何れも同一の大きさの慾望となるとの論斷に達したるものが即ち予の見也。而して予が此く一物に依りて充され得る慾望間には連絡ありて互に大小の別あり、從て何れも同一の大きさのものとなるべしと主張する其根、底は慾望が自變すと云ふ點に在る也。然らば慾望は何故に自變するやと云ふに抑も慾望とは不足の感と此不足の感を排除せんとする願望とより成るものなるが此不足の感なるものは現實的のものなるが故に、實際に充足せらるゝに非ざれば消滅せず、亦其代り充足さへせらるれば其充足せられたる限度に於ては必ず消滅す可き性質のもの也。然るに此不足の感を排除せんとする願望に至りては則ち全然想像的のものなるが故に一に其人の心持ち如何によりて生滅し實際に不足が

75 充足せられ不足の感が消滅するに至らざるに先ち充足せらるゝ丈けの材料存在せりとの信念をさへ得るに至らば此排除願望は立所に消滅すべき也。例へば吾人如何に渴し居るとも眼前に多量の水の存在するを見ては、渴てふ不足の感を排除せんとする願望即ち水を得んとする願望起らざる也。然るに一方不足の感即ち渴は實際に水を飲む迄は決して銷却せらるゝことなき也。吾人只牛肉を購ひたるのみにて未だ之を食はざる時は、牛肉に對する不足の感は未だ匿されずと雖も而も牛肉を更らに得んとするの願望は起らざる也。然るに慾望は不足の感のみよる成るには非ずして此感と是れを排除せんとする願望とより成るものなるが故に、此く排除願望が充足前に於ても減少することある以上は、不足の感獨り依然たるも慾望、其者は減少せざるを得ざる也。而して効用とは慾望を充足するの力なるが故に此際効用も亦充足行爲のある以前に於て早くも既に滅せらるゝを免れず是れ即ち慾望に自働的變動ある所以にして、是れあるが爲め、單に存在量を一見したるのみにして既に之に對する慾望は滅する也。斯く論じ來らば一定の時に當り同一財の同一分量にて充足せらるべき慾望は何れも同一大のものに迄自變す

べき事誠に明白ならん、是れ強 \times 弱 \parallel なる式の出でたる所以にして、從來の限界効用説は慾望の變動を測定すと稱して其實慾望の一部分たる不足の感の變動を測定したる迄の事也。効用を客觀的に解するの可否は茲に別論として、若し之を客觀視して其の論理を貫かんとせば効用は一定不易ならざる可からざるが故に $10+9+\infty$ — となり得ざるは明かなり。次に効用を主觀的に解して其論理を貫かんとせば必ずや予が前述せし所の如くならざる可からざるが故に是れ亦 $10+9+\infty$ — となり得ず。獨不足の感は主觀的にして且現實的なるが故に、寔に世上論者の云ふ如く $10+9+\infty$ — と成るものにして亦然か成らざるを得ざるもの也。されば三邊教授が夫れ然り而して斯く解し來るに於ては氏が『從來の慾望順次下降表寺尾曰、寧ろ不足の感順次降下表は例へば一盃目の酒、一口目の羊羹は吾人の舌上突起に如何なる受感を與へたるや、第二盃目は第二口目は如何と云ふ風に實際受けたる受感を事後に至りて一々漏さず記載したる反應試験表に外ならざるなり』と云はるゝ點も亦た誤解たること自ら明なる可し。蓋し惟ふに寺尾氏は一部の論者が例を、飲食の如き場合に探りて輕々に説明し去るを見て此くの如きは

是れ實際に飲食したる後に於て檢出せる實感に基ての効用の大小を云爲するものに外ならずとなし、然る後に此くの如きは不合理なり、誤解なり、不可解の代物なりとせられ、終に右の如く攻撃をなされたるものなる可しと雖も、從來の論者が例へば飲食して其味を知り、然る後に其實際の受感を基礎として効用の大小を云爲するものにあらざるは、少しく注意して其所論を讀めば決して察し難からざるのみならず、余が前後に引用せるが如き例解に就きて之を見れば、其意極めて明白なる可きなり、然れば余は曰く、是も亦氏の誤解に外ならずと云はれたる第二の反問は是れにて遺憾なく氷解したりと信ず、以上を以て第二問の全部に答へ置きたる積り也。

(附言)而して不足の感は現實的のものにして毫も豫見性を有せざるが故に實際に之を充足したる後に非ざれば其充足より得べき受感の大きさを量る事能はざる也、此點慾望慾望内には願望てふ考量的豫見的のものありが豫見的なるに比すれば大差あり。豫見性あればこそ充足前に當りて其大きさを計り得て世上論者が之を充足する事によりて $10+9+\infty$ — を得と云ふが如き手前勝手なる數量をも充足前に於て算定し得るなり。効用を主觀的と認め乍ら其豫見的自變を認めず、其豫見的自變を認めず、に其豫見的計算を行ふ等限界効用説を奉ずる者には前後の矛盾多し。

諸各單位の効用何れも同一となりたりとすれば、特に限界効用と稱す可き効用

なく、一視同仁効用は凡れも皆同一也。茲に於てか \times 冊 \parallel 冊 \parallel 冊なる式を否認し \times 冊 \parallel 冊 \parallel 冊となる。故に予は慾望を充足する力と解したる効用の中に於て限界効用なる特殊なる効用の存在を否定し、斯くて限界効用説其者の存在を否認するもの也。若し夫れ所謂限界効用説なるものが不足の感を充足する方に外ならざる効用の階級的變動の最後のものとしての限界効用を主張するものなりせば、予と雖も其の理論としての存在を認むる位の寛度は之を有するものにして、現に全部効用に關する誤謬に於ても是れを是認しおきたり。然り、然れ共此くの如きは彼等の望む所に非ざるを如何せん、而して亦此くの如き不足の感の記録表は我經濟學に於て之を研究するの要無きを如何せん。

〔第三問〕以上を以て予は第二問に答へ盡せるが故に今より第三の反問に對して答ふるあらんとす。

三邊教授は、以上説き去り、説き來る所によりて、余は寺尾氏の舊説に對する駁論は其實決して駁論とならざるものなるを明にし得たりと信するが故に、以下更に一步を進めて氏の提案たる \times 冊 \times 冊 \parallel 冊 \parallel 冊 \parallel 冊なる算法の不當なる所以を簡單に

論證せんとす。即ち先づ假りに氏の説に従ひ \times 冊 \times 冊 \parallel 冊 \parallel 冊なりとして、之を前記の米五石云々の例に適用し、其結果に就きて之が當否を検せん、此場合に於ては米の各一石の限界効用は假定に従ひ零なるが故に、氏の算法に従へば $\circ \times \circ \parallel \circ \parallel \circ$ となる、換言すれば其五石の米は吾人に何等の効益をも與へ居らずと云ふ事となる、詳しく言へば吾人は五石中の四石の米を或は食料用とし或は釀酒用とし或は牧畜飼養料として充用しつゝあるにも拘らず其中の一石を餘分とし過剩として之より効益を受け居らざるに依り其米全體に對して何等の効用をも認めずと云ふに歸着す。眞に奇妙なる算法にあらずや。學理は必ずしも常識と一致することを要せず、而も斯の如きは餘りに甚しき背反にあらずや。之を此場合に於て其五石の米より受くる全體の効用は $\circ \times \circ \parallel \circ \parallel \circ \parallel \circ \parallel \circ \parallel \circ$ なりと云ふ寺尾氏の所謂舊式算法の結果と比して、何れが常識的にして、而も亦た吾人の理性を満足せしむ可きや。寺尾氏以外何人と雖も後者なりと言ふを拒まざる可し……と云はる。是に對しては二點より答ふべし。

〔一〕教授が換言すれば其五石の米は吾人に何等の効益をも與へ居らずと云ふこ

といなる。詳しく云へば吾人は五石中の四石の米は或は食料用とし或は釀酒用とし或は牧畜飼養料として充用しつゝあるにも拘らず……其米全體に對して何等の効用をも認めずと云ふに歸着すと云はるゝは其根底に何かの誤念潜在するやに思はる蓋し此筆法を以てせば予は日々渴を實際に譬しつゝあるに拘らず水に効用を認めずと云ふ事を驚かざるべからざるに至れるべければ也。効用の何たるやを反省すれば其理直ちに分明となるべし。只教授の提案が如何にも尤もらしく聞てゆる理由換言すれば五石の米に何等の効用をも認めずと云ふ予の算法が如何にも沒常識の如く聞てゆるは是れ教授の提案たる第五石目の一石の効用は零なりてふ常識に叶はざる前提あるが爲めにして該例をして沒常識に響かしむる當面の責任者は斯かる前提を築きたる教授其人なりと予は思ふ。乍去此くの如きは第三問中の瑣細なるものなり重要なるものは他に在り。而して是れを解かばイ教授の前提を容るゝとも亦且其五石の米に効用あり従て予の算法の沒常識的に非ざる事ロ教授の前提が實際甚だ沒常識的に感せらるゝ事は明白なるが然らば何故に斯くも沒常識的に感せらるゝやと云ふ事の二者を明かにし得る也。

(三)今左に説く所は教授が予に致されたる反問三個の中にて稍々私見の正面に向へりと思はるゝ唯一の反問なるが楮之に對しては予は慾望中の排除願望の時間的反射を述べて答へに供さんとする也。

予は曩に不足を排除せんとの願望は不足を排除し得んとの信念さへ具はれば(見込さへ附けば)實際現實に不足の感を銷却し去らずとも事前に於て消滅し去るものなるを述べたるが是れと反對に不足の感は一時的には必ずや消却せられ得るものなるが而かも斯く不足の感の消滅して存在せざる刹那に於ても尙不足排除の願望は存在し得るにて即ち後日の事を顧みて後日起るべき不足の感を排除するの材料を今日に於て獲得し置かんと希ふものにして貯蓄の心理即ち是也(野蠻未開の民には不足の感も少なき事ならんが之を排除せんとの願望の少なき事従て貯蓄心の少なき事が彼等に慾望の少なき重要なる理由の一なり野蠻人には慾望の少なき故貯蓄心少なしと云ふは誤なり彼等には力性たる願望少なし故に貯蓄心も慾望も共に少なし兩者の關係は並存的にして因果的に非ざる也)三邊教授が五石の米の効用が〇×〇〇〇〇なるの私見を擧げて實際の實情に符合せずとせ

らるゝ其米は如何なる米なりや假りに一ヶ月に五石を要すとの意なりとして偕極端なる場合を假想し先づ毎月無窮に五石の米が地上に湧出すか空より天下るとの意なりとせん。然らば其供給無代且無窮なる故其米の効用は $\infty \times \infty = \infty$ によりて零なり。蓋し現に何等の効用をも與へ居らざるのみならず亦何時迄待つとも無窮なる故現在と同様何時の時に於ても零なるべければ也。次に若し其五石の米のみ存し絶對的に不可再獲得的なりとの意なりとすれば然らば其現存せる米の現在に於ける効用は $\infty \times \infty = \infty$ により零なり。然れ共翌月に至らば餓死せざる可からざる事明かなるが故に、今若し此餓死を免れんと欲する願望即ち「生」に對する慾望は無窮大なりとすれば、一ヶ月後に於ける此無限大の慾望に反射し來りて其人をして五石は愚か一合の米をすら安んじて消費するに致らしめざる也。従て $\infty \times \infty = \infty$ の正反對なる $8 \times 0 = 0$ で ∞ のものが一ヶ月の後方より反射し來るもの也、而して此兩極端の中間が現時の狀況に近し故に予の式 $\infty \times \infty = \infty$ も最近の形式 $\infty \times \infty = \infty$ も共に決して事實に反する事なき也。此反射あればこそ予は安んじて彼の式を主張し所謂全部効用を誤謬なりと論斷したる也。否慾望に不

足の感以外に願望てふ想像的考量的方性存すればこそ慾望は自變して $\infty \times \infty = \infty$ 全なる式を得、慾望に願望てふ反射的分子存すればこそ慾望は反射して能く自變の意義を完成したる也。蓋し自變とは必ずしも自働的低落のみを云ふに非ずして、反省的維持をも含むものなればなり。(ゴッセン二六頁パッセルの資本論の精神)

以上の外教授は番號を附せずして予がグライザー及フッターの所謂價值と効力とを混同し居る旨論せられたるも、予より觀れば之に對する返答は眞面目なる話の域外に在るものとしか考へられざるが故に敢て駁撃の勞を靡せず。只教授の再考を望むのみ。

斯くて予は三邊教授反問の全部に對して、予自身には一時的間に合せのみに非ずして根本的なりと認むる答辯を簡單に試み置きたる積なり。其結果予は不幸にして一點も蒙を啓くを得ざりしを遺憾とするものなるも、斯く教授が卑説を半解せられたるは決して世に所謂半解の類には非ざるにて、其責任の一半は予自ら負ふべきものなり。壁頭明かにする所の如く、全部効用に關する誤謬は慾望の自變に其根底を有し、後者は亦予の世界觀に其源を發す、と云ふも予一個の考へにあら

84
 ず、實は世人の考へは斯くあるべき筈のものなるを中途にて誤解曲解せるに因る也。斯くて予は二個の *nacheinanderfolgende Voraussetzungen* を默認して其上に論を立てたるが故に非常に注意力の敏き人が非常なる同情的態度を以て讀み呉れざる限り彼の論文に於ける予の眞意は終に葬らるゝを免れざるべく予は讀者虐待の罪を其一人としての三邊教授に謝し置くものなり。而して亦予をして世人より甚だしく誤まられ居る事及び如何にして予の根本的立場を明かにす可きやを考案するの要あるを悟了せしめられたる我三邊教授の學恩は予が此見を把持してかはらざる限り長く記念して忘れざる可し前に教授が予の根本的立場即ち慾望中の願望に「力性」を認むる事の結果としての「慾望の自變」に對して更に再び高教を垂るゝを吝まれざらん事を切に請望して休まず。但し其節には其旨拙者迄通知あらん事を併せ乞ひ置くべし蓋し予は三邊氏が「學報」上單説を批評し居らるゝ事は、約十日後に至つて前慶應教師たる學友林政三君の好意により始めて識るを得たるにて、若し此事微せば恐らく三邊氏の駁論は *Innocent pass* を選くし得たりし事と思へば也。

「終りに臨み、福田博士の高恩と高城ドクトルの厚誼を謝し併せて慶應大學の發展を祈る(一月四日夜)」